

「仕事で一番大切にしたい 31 の言葉」という本からです

新しい事業を始める際に、もっとも重要なこと、それは自らに「動機善なりや、私心なかりしか」と問うことだ。

（京セラ 創業者 稲盛和夫）先回の続きです

稲盛和夫は 1931 年（昭和 7 年）1 月、鹿児島市に生まれた。男 4 人、女 3 人の次男。父親は印刷業を営み紙袋も作っていたが、敗戦直後の空襲で工場と機械は全滅。戦後は焼け跡に建てた掘っ立て小屋での貧乏生活だった。1948 年（昭和 23 年）に、現在の市立鹿児島玉龍高校に入学。稲盛青年は母の注文で近所の人たちが内職でつくった紙袋を自転車に積んで、闇市や駄菓子屋、雑貨店など行商してまわった。1 年ぐらいの間に、市内の紙袋の販売を独占するようになった。無理して高校行かせてもらったので、卒業後は地元の銀行に勤めるつもりでいたが、担任が両親に「どうしても稲盛君を大学に行かせてほしい。高校でも奨学金を貰っているのだから、大学へ行っても貰えるはずだ」と説得してくれた。叔父が結核で亡くなり、和夫も 13 歳のとき、結核で死にかけた。「人を助ける薬をつくりたい」と大阪大学医学部薬学科を受験したが合格できず、地元の鹿児島大学工学部応用化学科に進んだ。成績はトップだった。教授は「どこでも採ってもらえる」と請け負ってくれた。石油会社に就職したかったが、縁故のない地方大学出の稲盛は、どこからも相手にされなかった。空手を習っていて腕っぷしには自信があった彼は、ふて腐れてインテリやくざになってやろうかと真剣に考えた。心配した教授が、知り合いが技術部長をしている送電用碍子メーカーに頼み込んで、やっと採用が決まった。1955 年（昭和 30 年）春、京都の松風工業に入社。従業員 400 人いたが、最初から給与は遅配。オーナー一族が内輪もめをしていて、労働争議が頻発した。新入社員は 5 人いたが、呆れて次々と辞めていった。たった 1 人残されて、かえって気持ちが吹っ切れた。研究室にふとんや鍋を持ち込み、朝から深夜まで研究に没頭、電子用のニューセラミックを開発した。セラミックの焼き物のことだ。日立製作所が稲盛を指名して、セラミック真空管をつくってほしいと頼んできた。先方の基準に合うようなものをつくれなくて悪戦苦闘していると、新任の技術部長が「君の力量では無理だ。うちには、京大を卒業した先輩が何人もいる。彼らにやってもらおう」と言い出した。鹿児島大学出にはできっこない、と頭から決めてかかったのだ。この言葉を聞いた稲盛は切れた。「どうぞ、そういう優秀な人にやらせてみてください。私は辞めます」と辞表を叩きつけた。稲盛は若いころからカリスマ性を持っていた。彼の磁力に惹きつけられて同志たちが集った。こういう人たちの物心両面の支援がなかったら起業はできなかつたらう。稲盛は取引先のパキスタンの事業家から工場長にスカウトされ、パキスタン行きが決まった。ところが、稲盛が辞めると知ると同僚たちが「我々も辞めます」と言い出した。稲盛の能力を買っていた前任の上司だった青山政次（2 代目社長）伊藤謙介（5 代目社長）ら 8 人が血判状に署名した。会社をつくるには先立つものが要る。カネだ。だが、青山には当てがあった。京都大学工学部電気科の同窓で、京都の配電盤メーカー、宮木電気製作所の西枝一江専務と、交川有常務の 2 人だった。青山は稲盛を連れて出資を頼みに西枝を訪ねた。「お前は、アホか。この稲盛君がどれほど優秀かしらんが、26、7 歳の若造に何ができる」と一括された。それでも青山はひるまなかつた。「稲盛君の情熱は並外れている。必ず大成する」「情熱だけで事業は成功するのか」と言い返えされると、稲盛も負けずに「将来きっとニューセラミックの時代がやってくる」と必死に訴えた。2 人は何度も出かけて頭を下げた。そしてついに資金援助を受けることができた。1959 年（昭和 34 年）4 月 1 日、京都セラミック（現・京セラ）が発足した。

稲盛氏は、最初、どんな職業に就きたかったですか？

()

日立製作所は、稲盛氏に何を依頼しましたか？

()